

学校経営推進費 評価報告書（最終）

標記について、下記のとおり提出します。

1. 事業計画の概要

実施課程名	全日制の課程
取り組む課題	英語教育の充実
評価指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実用英語検定準2級以上合格者の割合</li> <li>・ 実用英語検定2級以上合格者の割合</li> <li>・ TOEIC&amp;TOEICSWの目標スコアの達成率</li> </ul>
計画名	「クラスサイズ克服とパーソナルサポート充実による英語4技能向上計画

2. 事業目標及び本年度の取組み

学校経営計画の 中期的目標	<p>(1) 教育力の向上</p> <p>① 6年一貫校の強みを活かし、中学校ではまず基礎学力と学習習慣の確立を図る。特に積み重ね教科である、英語と数学で複数教員による習熟度別授業を取り入れ、「できない」という意識をなくす。</p> <p>② 将来的に生徒用デジタル教科書の導入や、オンライン教材などを効率的に授業内で活用するための環境整備の基盤として、住吉幼少中高全体のネットワークの再構築を検討する。</p>
事業目標	<p>Career (キャリア)・Art (アート)・English (イングリッシュ) を教育の柱として打ち立て、伝統ある「力の教育」を具体的な形で強化していく。本校のこの教育理念は、文系・理系・音楽系・美術系という多様な興味を持った生徒を育てるヴェルジェ (フランス語で果樹園を意味する) コースと、関西学院大学との提携コースである関学コース、両コースで追求されるものである。中高大10年一貫教育となる関学コースでは特に、英語の力を、生徒たちが将来21世紀の世界で活躍するための基礎力として重要視している。進学先となる関西学院大学は、2013年度からスーパーグローバル大学 (SGU) に認定されており、高い英語力を備えて入学した生徒たちにとって理想的な教育・研究の場となっている。2009年の関学コース開設以来、本校では英語力の向上に取り組んでおり、一定の成果を上げてきている。CEFR (外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠) に照らし合わせると、「基礎段階の言語使用者」と位置づけられる「A2レベル」まではほぼ達成してきている。それをもう一歩進め「自立した言語使用者」となるための「B1レベル」へと生徒たちの英語力を高めて大学へ送り出すことで、大学入学後の更なる活躍を推し進めたい。</p> <p>大学入学後の資格検定取得率・GPA・国際交流志向性等を調査することで、大学入学後の発達状況を追跡調査し、高大連携の効果的な指導法をも探ることができよう。「英語力評価及び入学者選抜における資格・検定試験の活用促進について」(文部科学省初等中等教育局長及び高等教育局長)における「各試験団体のデータによるCEFRとの対照表」に挙げられた資格試験では、スピーキングとライティングというアウトプット力(発信力)を計測する試験が網羅されている。従来の日本の英語教育で十分に伸ばしきれない発信力向上が重視されていると考える。このスピーキングとライティングという技能を指導するに当たり、最も大きな障壁のひとつが、大きなクラスサイズである。「少人数指導」および「個別指導」が充分になされなければ、より多くの生徒が英語で発信する機会を享受し、正確な発信力を習得することは困難である。しかしそれを教員数の増加で実現するのは、特に私学においては難しい面も多い。本事業では、ICT機器を効果的に活用し、教員のICT活用能力を高めることで、クラスサイズの問題を克服し、生徒の英語による発信力を飛躍的に向上させ、その成果を英検の合格者数とTOEIC&amp;TOEIC-SWの得点率で実証する。</p>
整備した 設備・物品	<p>① 多人数クラスで個別指導を可能にするICTソフトウェア・ハードウェア</p> <p>② 自学自習用アプリケーション</p> <p>③ 生徒用ICT機器 (タブレット型パソコン1クラス生徒数および予備45台・関連充電機器・移動式管理庫)</p> <p>④ 生徒検定受験料</p> <p>⑤ 追跡調査関連費用および統計処理ソフトウェア・ハードウェア</p>
取組みの 主担・実施者	<p>主担：英語科 実施者：「英検・TOEIC」「英語演習」担当教員</p>
本年度の 取組内容	<p>新しい大学入試センター試験 (大学入学共通テスト・仮称) での、英語試験4技能化に向けて、ライティングとスピーキングの指導方法とその評価方法に注目が集まっている。BICS (Basic Interpersonal Communication Skills: 生活言語簡単) とカテゴライズされる、簡単な挨拶などのレベルでのスピーキングは、条件反射的な能力を高める指導でカバーできる。小学校の英語 (活動) で主に指導されているレベルのアウトプット力と合致する。</p> <p>一方、CALP (Cognitive Academic Language Proficiency: 学習言語) は、より高度な知的な活動、脳内処理が要求される。このレベルのスピーキング指導は、ライティングの指導と不可分だと考えている。ライティングを通して、論理的思考力と英語の表現力を、時間をかけて高いレベルでアウトプットできる力を身につける必要がある。本年度は、こうした背景を踏まえて、ライティングの指導に注力し、その成果を評価する方法を検証した。</p> <p>まず活用したのは、TOEFLのETSが主催している「Criterion」である。エッセイライティングを効率よく採点するプログラムである。指導者はトピックとレベルを設定し、その指示に従い、学習者はPCで、インターネットを通してライティングを提出する。AIによる採点で、結果は即座に返却される。グレードと共に改善点等が色分けして提示される。</p> <p>システムとしては、ライティングが即座に判定され、高度な内容のエッセイライティング指導に適している。しかし、あくまで大学生・社会人を対象としたものであり、細かいレベル分けがなされておらず、中高生のように、学習者のレベルに大きな幅がある段階では、評価がおおまかで、レベルの識別性が低い。生徒を励まししながら、少しずつレベルを上げていく指導にはあまり適していなかった。</p> <p>センテンス単位の、より丁寧な指導に活用したのが、「Phrase Phrase Me」というプログラムである。こちらインターネット上でライティングを提出するという点では同様のものだが、エッセイライティングではなく、センテンスレベルの構成力を向上させることに焦点が合わされている。このプログラムでまず、正確な文をしっかりと書けるようにした。生徒にとっても、書ける英文・書けない英文が明確になり、モチベーションが向上した。</p> <p>エッセイライティングについては、GTEC受験に向けて、GTECのライティング問題を主に活用して実施した。記述方法については、PCを使つての指導と手書きによるものを併用し、PC操作がライティングのレベルに反映され過ぎないように配慮した。</p> <p>その他、Show and Tellのプレゼン、オリジナル商品のプレゼン“You are a salesperson”、英語版TV番組の創作“Let’s make a TV Program”、英字新聞の作成、ALTによる英検面接指導とインタビューテスト等を実施し、モチベーション向上を図りつつ、ライティングを通じたスピーキング指導を行った。</p> <p>※前年実施した「TOEIC&amp;TOEIC-SW」は、受験費用が高価であり、学校での実施には準備のハードルが高く、今年度は実施せず、昨年報告に記したように、GTECをより幅広く活用し、成果検証には英検を用いた。</p>

<b>成果の検証方法 と評価指標</b>	<p>検証対象生徒 83名（高校3年生）  2017年2月現在「実用英語技能検定」  準2級取得率99%（前年98%）・2級取得率77%（前年73%）  2016年7月現在「GTEC（Listening・Reading・Writing）」「GTEC Speaking Test」  Listening &amp; Reading 平均641.3（最高990）・Speaking 平均110.2（最高190）・Writing 平均133.8（最高190）</p>
<b>自己評価</b>	<p>昨年度よりライティング試験が導入された英検2級について、昨年度同様本事業の取組みが効果を発揮し、より高い合格率を達成することができた。（◎）  また、英検各級での「一次試験（Reading, Listening, Writing）」段階での合格率は次のようになった（準2級一次試験 合格率100%・2級一次試験 合格率82%）。これは過去最高である。（◎）  準2級・2級とも、二次試験を含めた取得率よりも高い結果となっている。これは、「二次試験（Speaking）」で不合格となった生徒が数名いるということである。上述したように、Show and Tellのプレゼン、オリジナル商品のプレゼン、英語版TV番組の創作、英字新聞の作成、ALTによる英検面接指導とインタビューテスト等を実施し、モチベーション向上を図りつつ、ライティングを通じたスピーキング指導を行ったが、悪い結果とは言えないまでも、それらが100%の効果を出さなかったことを意味している。（○）  個々の生徒に応じたレベルで、個別に取り組むことができる環境は効果的なものであったが、昨年同様、無線ネットワークに大きな負荷がかかった。今年度の対策としては、動画サービスは活用せず、webテスト、webドリルに絞って活用することにした。ネットワーク環境の充実が今後の課題である。（○）</p>
<b>事業のまとめ</b>	<p>「Criterion」「Phrase Phrase Me」といった、インターネット上のプログラムを活用することで、ライティングの指導において、より効果の高い手法が見出され、よい結果が出た。  今後、オンラインおよびオフラインでのスピーキング指導に、より効果・効率の高い手法を模索していく端緒となった。  生徒たちのICTへの親和性が高まっており、指導の効果を高める素地ができているが、一方で、タッチ入力に慣れた世代であるがゆえに、キーボードによる入力速度が非常に遅い生徒も多い。ライティング指導に関しては大きな障害となるので、情報科との連携を図り、入力速度の向上を図る必要が明確になった。  ICTを活用して、クラスサイズの問題を克服するという目標は、いくつかの課題を残しつつも、授業中の生徒の活動量が飛躍的に増加し、検定試験の結果も向上するなど、ある程度満足いくレベルまで達成することができた。  今後の英語4技能の向上に向けて、さらなる教授システムの充実を考える上で大きな一歩となった。</p>